
僕は友達が少ないif

赤司楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は友達が少ない

【NZコード】

N6397Y

【作者名】

赤司楓

【あらすじ】

銀色の髪に碧緑の眼が特徴的な高校生——黒崎一護。
金髪碧眼が特徴的な高校生——柏崎星奈。

お互いの両親の勝手な理由で『許嫁』にされた二人。

しかし、この『婚約』に反対したのは黒崎一護だけだった。

柏崎星奈の方は本気で一護と結婚する気ている。

果たして、一護は星奈との『婚約』を破棄する事が出来るか——。

『僕は友達が少ない』の一次創作です。

頑張つて完結させる気でいますので応援宜しくお願ひします。

感想募集中です。

プロローグ・忍冬『スイカズラ』（前書き）

宜しくお願いします。

プロローグ・忍冬×スイカズラ

銀色の髪を差してか、碧緑の眼を差してか、それとも冷めた性分を差してか、みんな俺を『氷のようだ』と言っていた。

それが原因かどうかは分からぬが、俺には友達と呼べるような存在は数人しか居なかつた。唯、俺は逆に友達が少ない方が居心地は良かつた。別に格好つけてる訳では無い。俺は、人と話すのが少し苦手だ。『対人恐怖症』とまではいかないが、それでも普通の人と比べると、話すのが少し苦手だつたと思う。

だから、“あいつ”が俺の『幼馴染み』だという事が、俺は苦痛で仕方がなかつた。

だつてそうだろ？ “あいつ”はこの学園の理事長の一人娘で、金持ちで、成績優秀で、運動神経抜群で、何でもすぐにこなせる天才肌で、容姿端麗で、巨乳だ。それで、性格が極度のナルシストで高飛車な女王様。

そして、一番最悪なのが俺と“あいつ”が『幼馴染み』で『許嫁』だという事だ。

勿論、俺はその事を『認めていない』。だから、“あいつ”も『認めない』と言つてくれたら楽だつたのだが、楽だつたのだが、：“あいつ”は満更でも無い様子で、俺達の親兄弟の前で満面の笑みを浮かべながら、こう言い放ちやがつた。

『まかせといて！』と……。

最悪だった。何が『まかせといて！』だ。“あいつ”は一体何を考えてこんな言葉を言い放ったんだ……。

俺はあの時“あいつ”が口にした言葉を脳内で再生する。

——『まかせといて！』

この一言で、たった一言で、僅か七文字で、俺の生活は激変した。俺が“あいつ”と『許嫁』になつたという事は、三日も経たずに瞬く間に学園中に広まつていった。本当に最悪だった。“あいつ”的周りにいる変人（変態？）には嫌な眼で見られるわ、“あいつ”的ファンクラブの会員共には訳の分からん抗議をされるは、クラスにいるモブキャラ共は、普段話しあけてこないくせに、こいついう時は面白半分で話しあけて来やがった。

本当に迷惑な事だ。

俺は唯、平凡に生きたかった。

別に友達が少なくとも『一人の親友』さえ居ればそれで良かつた。お互いの両親の下らない『理由』で勝手に『許嫁』にされ、その『許嫁』の方は、本当にそれを真に受けて俺と本気で結婚する氣でいやがる。

ああ、頭痛がする。

せめて高校では普通に生活したい。

恐らく、俺は“あいつ”——“柏崎星奈”^{かじわさきせな}と『許嫁』になつた田の事を一生忘れないだろう。

『ねえ、一護、忍冬の花言葉って知ってる?』^{スイカズラ}

プロローグ・忍冬《スイカズラ》（後書き）

感想待つてます。

第一章・隣人部発端篇···? ·寝坊···?

眼を覚ますと、何故か金髪碧眼の美少女——柏崎星奈が俺に膝枕をしていた。……おかしい。昨日は確かにこいつは俺の部屋に居なかつた筈だ。なのに何で朝になつたらこいつが居て、しかも俺に膝枕をしている？いや、それよりこいつはどづやつて俺の部屋に入ってきた？部屋の鍵は勿論、家の鍵も閉めといた筈だ。……こいつ、まさか鍵を壊して入つてきたのか？

俺は恐る恐る口を開く。

「……おい、何してやがる」

「あ、起きたの一護。おはよ、朝はん出来てるって“お母さん”が言つてたわよ」

こいつ、この情況で普通に『朝はん出来てる』とか言つてきやがつた。ある意味恐ろしい奴だなお前は……。

俺は部屋の扉を確認する。鍵は……壊れていない。……こいつ本当にどうやって俺の部屋に入つてきたんだ。

頭の中で色々思案する。

そこで俺は一つの可能性を思い付いた。

……まさか、母さんがこいつを家に入れたのか？さつきこいつ『朝はん出来てるって“お母さん”が言つてたわよ』とか言つてたな。それってこじつは朝俺の母さんと話したつて事でいいんだな。という事は、

「お前どうやって俺の部屋に入つてきた」

「え？一護のお母さんが鍵を貸してくれてそれで……」

「勝手に人の部屋の鍵を開けた、と

「う、うん」

やつぱりそつかよ。

星奈が申し訳なさそうに言つ。しかしでも一応は罪悪感があるみたいだ。 罪悪感あるんだつたらやうなきやういのに……。

「星奈」

「なに? 一護」

「邪魔」

「つー?」

俺の言葉に、星奈は硬直した。思つてゐる事言つただけなんだけどな。

星奈が硬直しているのを無視して俺は自分の意思で膝枕から解放される。

俺は後ろに星奈が居るのにお構い無く上半身裸になる。見事な胸板と腹筋……とまでいかないが、中途半端に鍛えられた胸板と胸板が顔を出す。

まあ、腹出でるよりは中途半端に鍛えられた胸板と腹筋の方がまだましだな。だからといって筋肉隆々も嫌だが……。

制服に着替え終わつた俺は小さい鏡を机から取る。いつもと変わらない銀髪のシンシン頭、少しつり田で氷のような碧緑の瞳。はあ……、普通の容姿に生まれたかった……。

俺は後ろでずっと硬直している星奈に眼を向ける。

こいつこいつまで硬直してる氣だ。

「おい、星奈朝飯食いに行くぞ」

「……、」

反応無し。

面倒臭いな」こいつ。

「……！」

「いたあ！？」

容赦無い拳骨を星奈の頭に食らわす。

それを受けた星奈は少し涙眼になりながら、

「何すんのよ！ 許嫁の頭殴るってひどくない！？」

「うるさい、俺はお前を許嫁と認めた覚えは無い」

「何でよ！？」

「うるせー」

ドンッ！…

もう一度拳骨を食らわす。

「また殴った！！」

「今日もいい天気だな」

「さらっと流さないでよ！」

部屋の窓を開け、空を眺める。うん、良い天気だ。外の新鮮な空気を吸う。今日も空気が美味しい。味無いけど……。

「朝飯食いに行くぞ」

「だから無視しないでよ！…」

* * *

星奈を引き連れて、俺はリビングに入った。鞄をソファーの上に

置く。ついでに星奈も、視線を家族に向ける。俺達を待たずして朝飯を食っている。せめて俺達が来るまで待つとけよ……。

「あー、一護おはよっ」

俺に気づいた母さんが挨拶してきた。

「母さん、」

「なに?」

「俺の部屋の鍵星奈に渡しだろ?」

俺の言葉に母さんは黙り混む。

「一兄

「あ?」

妹の夏梨かりんが俺に話しかけてくる。無視する訳にもいかないから夏梨の方に視線を向ける。夏梨は味噌汁を飲みながら、「早く」はん食べないとちこくする

「……、」

夏梨は箸を時計に向ける。俺もそれを追つて時計を見る。
八時五三分。

「はあ!? 八時五三分!/? やべ! おい、星奈朝飯食つてる時間は無え!! 今すぐ学校に行くぞ!!」

「え? 待つてまだ味噌汁飲んで―――てちょお!?!」

味噌汁を飲もうとしている星奈の手を無理矢理引っ張り、ソファに置いてある鞄を二つ取り、玄関に向かう。未だ鞄が捌けていない星奈を問答無用で引っ張り、俺達は外に出る。

「ちょっと一護! まだ靴捌けてないって!!」

「それ所じやねえ! マジで遅刻するつづつてんだろーーー!」

「タンジュンだねえ、一兄は、」

「助かつたわ」

「いいよ」

「なんだかんだ言つても、いちおう星奈ちゃんの事大切にしてるの
よね」

「そうだね……」

一護に手を引っ張られながら、あたし達は自分達が在籍している学園——聖クロニカ学園に向かっていた。

朝ごはん食べそびれちゃつたけど、それを帳消しにできるほど良いことが今起きている。

何年ぶりだろ? 一護に手を引っ張られながら学校に行くのって多分、小学生低学年以來かな。

一護の銀色でツンツンした髪が激しく揺れているのが、視界にはいる。ついでにあたしの金色の髪も。

はつきり言って、かなり速いスピードであたし達は走っている。学校に着いた時髪すごい事になつてるかも……。

正直言つてかなり疲れる。

「一護! 速いって!!」

そうあたしが言うが、

「あ? 結構スピード落としてる?」

……いやいや、だいぶ速いから……。正直言つて運動にかなり自信あるあたしでも一護に手を引っ張られてないとついていけないと思う。……そういえば、あたし一護に運動で勝つことないな。勉強普通なくせに何で運動神経だけ良いのよ……。

「くそ、何で信号赤に変わんだよ……」

「やつと休憩出来る……」

「お前体力無さすぎ」

「一護が多すぎきんのみ」

ジト目であたしが言ひ。

しかし一護は、

「いやいや、そんな事無いよ」

そんな事あるわよ。何で汗一つかいてないのよ。マラソン選手並みね。一護の体力の多さは。

それでも、制服着てる学生がやけに多いわね。ほんとに遅刻してるのかしら。

そんな事を考えていると、いつまにか信吾は青に変わっていた。それを見た一護がクルリと首だけを動かして、あたしを見た。

「走るぞ」

「うん」

あたしは素直にうなずく。

再び、あたし達は走り出す。

「ねえ、一護？ あんたは覚えてるか分かんないけど、小さい時はよくこいつやって学校に行つてたよね？ あたしは今でも鮮明に覚えてる。目をつぶれば瞼の裏に映像が流れる。……これ、さつきも似たような事言つたわよね？」 まあいいか。

顔が熱いのが手に取るように分かる。

多分、顔がリングみたいに赤くなってるんだろう。

いつから好きになつたんだろう……？

毎日見て、毎日遊んで、毎日聞いて、毎日……。いつから、意識し始めたんだろう。あの時からかな……。一護が――。あれ、急にスピードが……。

「おい、大丈夫か」

「え？ 何が？」

「『何が』じゃねえよ。疲れてんだろお前」

「……疲れてないけど」

「嘘付け、何年お前と一緒に居ると思つてんだよ。お前の事なら知りつくしてる。歩いて学校に行くぞ」

そう言って、一護はあたしから手を話す。

「ちょっと待つてよ、遅刻しちつなんでしょう？」

「ん」

一護が携帯電話を見せてきた。

八時 一分。

……なるほど、どおりで学生が多いわけね。

「……騙されたのね」

「ああ、騙された」

「……」

「……」

無言になるあたし達。夏梨ちゃん、そんな悪い子に育つてたのね
……。

第一章・隣人部発端篇···? ·隣人部···?

夏梨に見事に騙された俺達は、八時一五分と、かなり早くに登校してしまった。

まあ、それから色々あつて、午前の授業を全て終えた俺は、一人優雅に昼飯を食べていた。

今日の昼飯はコンビニで買ったカツサンド、カツラーメン、缶コーヒー、ついでに食後のスイーツのプリン。うん、相変わらずよく食うね俺は。

そう思いながら、俺はカツサンドを頬張る。……うん、美味しい。やっぱ“肉”は良いな。“肉”は。

それから、五分程でカツサンドを平らげた俺は、ラーメンに取り掛かった。……良い香りだ。……インスタントだけどな……。

俺は麺を箸で掴み、口に入れる。

その瞬間、

ドドドドドッ！

ダツー！

ガラツー！

「一護ー！」

柏崎星奈が思い切り廊下を走り、ドアを抉じ開けた。……おいおい、理事長の娘が校則破つたよ。いいのかよこれ。いいんだつたらせこくね……？

「……何の用だ。俺は今忙しい。早々にこの部屋から出でつけ
「これ！」

おいおい、すげえな。堂々の無視だよ。

俺はラーメンを口一杯に入れて、

「ほわえふええわあ。わあふえへえ（お前すげえな。じゃあ出でけ）

「なんて言つてんのよー」

星奈が華麗に突っ込む。うん。突っ込みの才能あるんじゃないかな
……？

星奈が机に一枚のプリントを置く。

「何だこれ」

「隣人部よー！ これこそあたしが求めていたものよー！」

そう言いながら、星奈はプリントをバンバン叩く。

仕方ないから、俺はプリントを取る。

。

そして絶句した。

何だこれ。つかおにぎりか……？ 手足あるぞ。何処だよー！

山の上か……？

まあいいや。

俺はそこに書かれている文章を読む。

『隣人部

とにかく臨機応変に隣人
とも善き関係を築くべく
からだと心を健全に鍛え
たびだちのその日まで、
共に思い募らせ励まし合い

皆の信望を集める人間にならつー。』

何だよこの訳の分からん部活は。星奈の奴ここに入る感じや無い
だろ?」

「……あ? んだよこれ『ともだち募集』…………?」

「一護も気づいたのね!」

「ああ」

……地味なネタ仕込みやがつて。

「で、何が求めていたもの何だ?」

「ともだち募集って書いてあるのよー? この部活に入ればともだ

ちができるわ!—!

出来るのかよ。

「好きにしろよ」

ラーメンを食べ終えた俺は、ザガートのプロンを手に取る。

「一護も入るのよ」

その言葉を訊き、俺は硬直する。

「……何言ってんだお前」

「言葉通りの意味よ。これ

そう言って、星奈は入部届けを俺に渡す。

「まじで……?」

「まじ!—!」

満面の笑みを浮かべ、星奈が答える。

「まあ別にいいか

……高校一年になつて初めて部活といつものに入る事になつた……のか?

第一章・隣人部発端篇··?··入部··?··?（前書き）

スマートフォンに変えたら、文の最初にマス開けれなくなつた。

第一章・隣人部発端篇···? · 入部···?

全ての授業が終わり、放課後になつた。星奈に連れられるがままに、俺達は隣人部の部室である『談話室4』に向かつていた。

今の俺は非常に鬱である。

星奈による拉致。

訳の分からん部活に強制入部。

周りからの嫌な視線。

……不幸だ。

まあ、俺の事はどうでもいいか。

星奈はと、

「……」

ご機嫌だった。これでもか、つて程にな。

俺は星奈に渡された新入勧誘プリントを再び見る。……やっぱりひどい。いや、ひどいを通り越して哀れみすら覚える。

この『隣人部』といるのは、本当は友達作りが目的の部活。部の紹介文には『臨機応変にやら、皆の信望』とか書いているが、實際この部に入る奴は皆友達が居ない悲しい奴という事になる。そのレツテルを貼られるのは、少し、いや、大分嫌だ。

「ここね

「……着いたのか

……入りたくない、が、星奈は俺の気持ちなど知る余地も無く、ドアをノックした。

——ノンノン

「」の部員もまさか柏崎星奈が入部してくるとは思つてもこなかつただろうな。
ただくじと。

「」の扉が開く。黒髪の女生徒が顔を出す。

そして、

「隣人部つてここののはここね？入部したいんだけど」と、星奈が言つた。

しかし、

「違う」

ばたん！
ガチャー！

そう言つて、黒髪がドアを閉めた。

「……違う？」「？」

「ちよ、違うこつ事よ……」

ドンドンドン……

そう叫んで、星奈は再び少し強めにノック（？）する。
あ、ドア開いた。

「ちよつと何で閉めるのよ！あたし達は入部——」「

「リア充は死——待て、あたし達？一人いるのか？」

「さうよーいわよ！……」

少しドアは開いた。

黒髪の女生徒がおれの顔を見る。
結構可愛かった。

「……」

「ちょっとと何考えるのよ！」

「よし、お前の入部テストをする。あの新人勧誘プリントを見て、何か分かった事はあるか？」

「無視しないでよーー！」

「……友達募集」

「良いだろ、合格だ。部室に入れ」

黒髪に言われるがままに、俺は部室に入れられる。そして、

「ばたん！
ガチャー！」

黒髪は再び鍵を閉める。

「さて、部活を始めるか」

星奈の事は完全無視。ある意味こいつもすげえな。

星奈の奴大丈夫か……？

「おいおい、いいのかよあの子は
あ、こいつが最近噂の転校生か。……うん、噂通りの中途半端な金
髪。

黄土色ヤンキーの言葉に黒髪は、

「何を言っているんだ、この黄土色ヤンキーは。あんな『リア充』
をこの部に入れてどうする？」

しかし、黒髪は本当に星奈の事はどうでもいいようだ。

「いやリア充つて……。つかあの子は誰だ？ 知り合いか？」

「……柏崎星奈。この学園の理事長の一人娘だ」

こいつ星奈が嫌いな女子の一人だな。

「へえ。あれがそうなのか」

この黄土色ヤンキーは今日初めて星奈を見たみたいだ。

「お前、名前は？」

いつの間にか、黒髪の話し相手は俺に変わっていた。

「……黒崎一護」

俺が名前を名乗り終ると、急に窓から音が聞こえた。

「…………！」

それを見た黒髪が心底嫌そうな顔をしながら、

「…………しつこい奴だ」

今度は窓ガラスにへばりついている星奈。確かにちょっと怖い。

黒髪は若干引きながら窓ガラスを開く。

「なんでそんな意地悪するのよー！」のあたしが入部してあげるって言つてるのに！」

「冷やかしならお断りだ」

「冷やかしじゃないわよー友達募集つてポスター見て来たんだから！」

「嘘つけ。わつきの答えを聞いて分かつたんだ！」

「嘘じやないわよー！」

「おー、黒髪」

俺がそう呼ぶと、黒髪はキツ、とおれを睨む。

「私は黒髪じやない。三日月夜空だ」

「じゃあ三日月。そいつが言つてる事は本当だ。俺より先に気付いていたしな」

「…………」

「話だけでも訊いてやってくれ

「ぐ、しかたない。話だけだぞ」

「あたしつてほり、完璧じやない」

ブチッ、という音が、俺の隣——三日月夜空から聞こえた。恐らく、先程の星奈の発言でキレかけているのだろう。

頼むからこれ以上三日月を怒らせないでくれよ。

しかし星奈は、

「頭脳明晰スポーツ万能、そして見ての通り美少女。神がオーダーメイドして造ったとしか思えない完璧な造形美じやない？」

……。

言葉を失う。

「……、」

こいつ、更に怒らせる気か。

俺は星奈に近づき、

「星奈、それ以上三日月をおこらせない方がいい」

「……、」

ジト眼で俺を見る星奈。

「ふん、下品な乳牛のくせに」

おい、三日月、さつき俺が止めたのを見ていたかつたのか？

それを訊いた星奈が、

「あら、貧乳が何か言つてらっしゃるわね」

星奈、お前も応戦しなくていい。

三日月からゴガガ……、という音が聞こえる。瞳には殺意が宿つている。

「……私は別に小さくない」

「中途半端な大きさの胸なんて“無い”のと同じじゃない?」「無いを強調されるな……」

「なに? やる気! ?」

「殺つてやる! じゃないか。肉! ! !」

いきなり眼の前で取つ組み合いが始まる。

俺と黄土色ヤンキーはため息。

俺は立ち上がり、

「止めとけ。星奈」

星奈の手を掴む。

「お前も座れ」

俺は三田円に立つ。

それから、

「おい、黄土色ヤンキー」

「え? 俺の事?」

「お前以外に髪の色が黄土色の奴がいるか? お前も止める」

「俺はヤンキーじゃねえ」

「そうかよ」

と、俺と……、誰だつけ?

「お前名前何?」

「羽瀬川小鷹」

「そうか。俺はさつとき言ったと思つたが、黒崎一護。まあ半ば強調的に入部せられたが、 “取り合へず” 実しくな」
俺達が血口紹介している間に、星奈と三田円は、

「……てめえ……パパに頼んで退学にするわよ」

「パパア? いい年してパパだのママだの言つて恥ずかしくないのか? いつまでも乳離れできない甘えんぼしちゃんには困ったものだな。生きていて恥ずかしくないのか?」

おいおい、だから何でお前等は喧嘩してんだよ。そして星奈、お前は何で涙眼になつてゐる。

「と、といひで…」

本当に殴り合いになる前に羽瀬川が強引に話に割り込んできた。

「「ああ？」」

ヒロインが言つてはいけない言葉の一つをあつさりと言いやがつた。
「か、柏崎は本当に入部するのか？」
「入るわよ。入部届け持つてきたし」

「ちつ」

三日月が露骨に舌打ちをする。

「……なんか文句あるわけ？」
「ある。出でけ。あ、違つた、死ね」
「あたしさあがあつ！？」

「ゴッ！－！」

これ以上面倒臭い事は嫌だから星奈を氣絶させた。
崩れる星奈をおんぶする。

それを見た二人は、

「……」
「……」
「……」
「……」

いきなりの出来事に一人は呆然としていた。

「悪いな。こいつ一回言つた事は何があつても絶対撤回しないんだ。
取り合えず、今日はもう帰るから、明日またこいつと話してやつてくれ

「くれ」

「断る」

「早えよ。じやあ帰るわ」

「明日も来い。ただし、そこの乳女は連れてくるな」「それは約束出来ないな。来るか来ないかはこいつが決める事だ」

俺はただ言つて、部室を出た。

そして、これが「うまい」なるか……

黒崎達が出ていったため、部室は静寂が支配していた。

俺としては、男子の部員が入ってくれることはすごい嬉しい。だけど夜空は、

「……私は絶対にあいつは入れないぞ……！」

柏崎に敵意丸出しだった。女子の部員が入ってくれるのに嬉しくないらしい。

何があつたんだよお前らに……。

「お前は何でそんなに柏崎の事嫌つてるんだよ」

「さつきも言つただろう。あいつはこの学園の理事長の一人娘だ。いつも男子にちやほやされているお嬢様気取りの好かないやつだ」

「お嬢様、ねえ」

柏崎星奈に黒崎一護。體分と個性豊かな面子が入ってきたもんだ。特に黒崎一護の方。

銀髪に碧緑の瞳。日本人の外見じやねえぞ、あれ……。

「……あれ？ 何で黒崎と柏崎は一緒に来たんだ？」

「さあな。誘われたんじやないのか」

「誘われたつて……。でもあいつ普通に柏崎の事殴つてたしな。柏崎の取り巻きじやないだろ」

「……、そうだな。多分あれが肉の婚約者だろ？」

「そうか……。あれがこんや——」

「待て。今夜空の奴何て言つた？」

「すまん。もう一回言つてくれ」

「『……、そうだな。多分あれが肉の婚約者だろ』って言つたん

だ

「はあ！？婚約者！？あいつ俺らと同い年だろ！？」

「何、だお前一ヶ月もこの学校にいて知らなかつたのか？」

「いや、そんな事言われてもな……」

同い年で、少し変わつた容姿で、婚約者……はいないけど、何か似たような似ていのいような境遇だな。

「ん？……ちょっと待て。じゃあ何で夜空は黒崎をこの部に入れたんだ？あいつだつて一種のリア充だろ？」

「あいつは嫌々『婚約者』になつたらしい。嫌々ではリア充にならん。それに、あいつが友達と一緒にいる所を私は見たことない」「じゃあ、あいつも……」

「同類だ。少し『特殊』だがな」

「……特殊？」

「すぐに分かるさ」

それだけ言って、夜空は部室をあとにした。

特殊……？何が特殊何だ？……分かんねえ。

髪の色とか目の色のことか？確かにあいつの外見はちょっと特殊だが……。

……一体何が特殊何だ……？

「黒崎が特殊なのは、まあ嘘だけどな」

――

行間：一

遙か遠い記憶。

俺達は出会った――。

――

「悔しい？」

「……別に……」

「格好つけちゃってー」

「別に格好つけてない」

「……、

「何だよ」

「じゃあさ、八極拳やつてみない？」

「はあ？ 何いきなり？ 頭大丈夫？ 出来るわけないじゃん」

「何故『やうづ』って誘つただけなのにそこまで言われなきゃいけ

ないのよ」

「だつていきなり変な事訊いてくんだもん。それに強くなれるわけないじやん」

「ほらまたそりやつて決めつける。強くなつたら星奈ちゃんを守れるよー」

「何でそこで星奈が出てくるんだよ……」

「まあ、素人相手に技使つたらあたしは問答無用であんたを破門するけどね」

「じゃあ習つてる意味ないじやん」

「はー本音出たね」

「……？」

「素人相手に技使つたら破門。じゃあ意味はないって事は、一護は星奈を護る為に使う気なんでしょ」

「……、」

「護るんじやなかつのは?だから星奈ちゃんを逃がしたんでしょ?」

「俺は別に……」

「頑固な子ねー。」^{じゅうさかえり}の高坂愛理が鍛えれば常人よりは一センチぐら
い強くなれるわよ?」

「たつた二センチかよ。じゃあ——」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6397y/>

僕は友達が少ないif

2011年12月1日19時52分発行